

ウズベキスタンと私

絹の道で舞った「夕鶴」

「シルクロードの中心地に、建国に燃える明治の志士のような人々がいる」

そう知人から聞いたのは十数年前。91年に旧ソ連から独立したウズベキスタンは、日本を手本に発展を模索していた。96年秋、民放の取材班とともに初めてウズベクの地を踏んだ。

首都タシケントに、ピザンチン様式のオペラ劇場があった。れんが造りの建物の壁や天井には、精巧な唐草模様の彫刻。手がけたのは、旧ソ連に抑留された約450人の日本兵だった。

しまのぶひこ
ジャーナリスト 寫信彦さん



番組で放送すると、元抑留者から大きな反響があった。「ウズベクとの交流を深めたい」と日本ウズベキスタン協会を98年に設立し、翌年、会長についた。

「いつか、あの劇場で日本の芝居を」。そう願い、日本の政府関係者や文化人らに掛け合った。01年、日ウズベクの混成劇団がオペラ「夕鶴」を公演。建設に携わった70代の元抑留者約10人も日本から訪れて舞台に上がった。万雷の拍手に、涙が止まらなかつた。協会創立から10年。今や活動はウズベクにとどまらない。今月には「中央アジアの魅力」をテーマに、東京都内で講演会やウズベク衣装のショーを開催。キルギスやロシアの留学生も詰めかけた。最近では、中央アジアの他の国々からも協会設立の要請が来る。

「次の10年は、中央アジア全域との友好親善を深めていきたいですね」

文・伊東和貴
写真・東川哲也

中国・南京生まれ。67年、毎日新聞社に入社。経済部記者やワシントン特派員を経て、87年にフリーに。「寫信彦の一筆入魂」など著書多数。コメンテーターとして多くのテレビ番組にも出演している。65歳。